

PURE 6

Manami & Yusei

風

fuu

termity



エタニティ文庫

C o n t e n t s

P U R E 6	5
-----------	---

特別番外編

目に見えぬひとへの誓い	293
-------------	-----

P U R E 6

1 買い物物のメリット

「うーん、やはり出ませんね」

携帯電話を手に不破優誠が言う。彼の言葉に、早瀬川愛美は眉を寄せた。

いま、愛美たちは、彼女の大叔母である一之瀬琴子の家にお邪魔しているところだ。

ふたりは琴子に話があつてやってきたのだが、そこに、不破の両親と祖母のアリシアが突然現れたのだ。もちろん愛美はものすごく驚いた。

不破の両親は、彼女に謝罪するためにここに来てくれたのだ。おかげで、これまでの誤解が解けただけでなく、愛美は母にまつわる過去の出来事も知ることができた。

「父は工房に行っているのかも」

不破の父を家に連れていくと、父の徳治に知らせようと電話しているのに……誰も出ないのだ。

「ええ、だが、上島は家にいるはずなのに……」

不破は腑に落ちないという顔で首を捻る。

上島というのは、不破家の執事だ。わけあって、不破の父、実継から解雇を言い渡された上島は、いま愛美の家に身を寄せている。

「父と一緒に、どこかに出かけたんでしょうか？」

「そうかもしれませんね」

「優誠さん、どうしますか？」

不破の父は、上島にとっても会いたがっている。不当な解雇をしたことを詫び、その理由を告げ、不破の家に戻してもらうために……

「もう一度かけてみて、連絡が取れなければ、父の訪問はまた後日ということにしてもらいましょう」

不破はそう言いながら、もう一度電話をかけた。

聞こえていた小さなコール音が、ふいに途切れる。ようやく出たようだ。愛美はほっとした。

不破は愛美に視線を向けて小さく頷くと、携帯に向かって名を告げた。

「実は思わぬことがあります、私の両親と祖母が一之瀬家に現れたんです。……ええ……」

「それで、私の父が、これからそちらにお邪魔させてもらえないかと言っているのです」

が。……はい、突然で申し訳ありませんが、これから」

父が何を言ったのか、不破が笑みを浮かべた。

「そう言っていただけと。……ええ、それではこれから帰ります。……はい。……はい。……」

ずいぶん長いこと相槌あいづちを打っている不破を見つめ、愛美は眉を寄せた。

いったい父は、不破に何を話しているのだろう？

「わかりました。……はい。それではあとで」

「あの、優誠さん、父は何を？」

通話を終えた不破に、愛美は尋ねた。

「帰りに食料品を買ってきて欲しいとのことですよ」

愛美は驚きに目を丸くした。

父ときたら、何を考えているのだ。これから不破家の当主である実継を連れてゆくというのに……食料品の買い物をしてこいだなんて……

「で、でも……優誠さん、優誠さんのお父様が一緒になんですよ」

愛美は焦りながら言った。

「別に構いませんよ」

涼しい顔で言う不破に、愛美は顔を引きつらせる。

不破の当主を、買い物に付き合わせるのか？

と、とんでもない！

困惑している愛美を置いて、不破はみんなのいる居間へと、さっさと戻ってゆく。

愛美は慌てて彼を追った。

「ゆ、優誠さんってば、そんなこと……」

愛美は不破を呼び止めようと小声で叫んだが、彼はドアを開けて居間に入ってしまった。どうやら不破は、愛美の言葉など無視するつもりのようなのだ。もおう。

愛美はその場で小さく地団太を踏み、急いで居間に入った。

「父上、徳治さんから、了解をいただきました」

「うむ。それでは、さっそく行こうか」

実継はさっと立ち上がり、琴子に顔を向けた。

「一之瀬さん、今日は本当にありがとうございました」

「いえ、いえ。お会いできて本当に嬉しかったです」

「私です。またお邪魔させてください」

「ええ、優誠さん、いつでも大歓迎よ」

笑みを浮かべている琴子に、不破も嬉しそうに微笑む。

「我が家にも、また昔のように遊びにきてくださいね。お義母様も、これからは日本に
いることが多くなりそうですし」

不破の母、麗奈の言葉に、琴子はさらに笑顔を広げた。

「それが一番嬉しいわ」

「そう言ってくれるの？　ありがとう、琴子さん」

輝くような笑みを浮かべたアリシアは、琴子の身体をぎゅっと抱きしめた。

「それでは、行ってくる」

「ええ。実継さん、ちゃんとお願ひしてきてちょうだい。けして忘れたりしないでね」

「わかっていますよ」

実継は母親に笑いながら答え、不破と愛美に向かって頷くと、ふたりを外へと促した。
アリシアのお願いというのは、愛美の家に訪問する許しを、徳治からもらってくるこ
のようだ。

不破の家族は、一之瀬まで実継の運転で来ていた。だが、実継の車は不破の車より大
きく、山の家までの細い道は通れないだろうと不破が指摘したため、実継は不破の車で
一緒に行くことになった。

不破の母と祖母は、実継の車を運転してくれる者を不破家から呼んで帰ることにした
らしい。

「愛美さん、優誠さんのこと、お願いします」

車に乗り込む直前、不破の母からそんな言葉をかけられ、愛美は焦りながら「はい」
と答えた。

祖母となにやら楽しげに話をしていた不破が車に乗り込んだのを見て、愛美も助手席
に座った。実継は、すでに車の後部座席で待っている。

「それでは」

不破の車が動き出し、愛美は不破の母と祖母にお辞儀をしてから、琴子に手を振った。
車が一之瀬の家から遠のくにつれて、後部座席にいる実継の存在を強く意識してしま
い、愛美の緊張は増すばかりだ。

まさか、不破の父を連れて家に帰ることになるとは……

車はノムラスーパーの駐車場に入って停まった。

「ここは、どこかね？」

実継のいくぶんいぶかしげな問いかけに、愛美はどきりとした。

もしや不破は、スーパーに寄ることを父親に話していなかったのか？

「あ、あの……」

「ああ、言うのを忘れていました。この店で買い物をして帰らねばならないのですよ。

父上は、ここでしばらく待っていてください」

不破の、横柄としか思えない物言いに、愛美は青くなった。

「買い物？」

「ええ」

「す、すみません。お知らせしておくべきだったのに……」

愛美は不破のぶんまで恐縮して謝った。

「ああ、構わないよ」

「あ、あの優誠さん、わたし、すぐに買ってきます。お父様と一緒に待っていてください」

「もちろん私も行きますよ。まな、貴方は何を買うか、ご存知ないでしょう？」

そ、そうだった……

愛美は赤くなった。

「な、なら、何を買うんですか？」

店内には愛美の幼馴染の野村光彦のむらみつひこがいるかもしれない。彼と不破が鉢合わせしたら、

気まずい。

おみそか

大晦日に、不破は光彦とここで顔を合わせたのだが、愛美と光彦の親しい様子を見て、かなり気分を害してしまったのだ。あのときの二の舞にはなりたくないのだが。

後部ドアが開いたのに気づき、愛美は驚いて後ろを振り返ったが、すでにそこには誰

も座っていなかった。慌てて視線をさまよわせると、なんと実継は車の外に出ている。

「私も同行させてもらおう」

は、はいっ？

愛美は咄然あぜんとして実継を見つめたあと、ぎこぎここと首を回して不破に顔を向ける。

彼女の顔を見た不破は小さく吹き出し、ゆるく首を振った。

「ついてくるそうですよ。まな、行きましょう」

「え？ ……え？」

困惑の呟きを漏らしながらも、愛美は不破が車から降りたのを見て、自分も転がるように外に出た。

スーパーの中は、夕食の買い物をするひとで賑わっていた。

実継を後ろに従え、愛美と不破は並んで店内へと入った。

手馴れた仕事で不破はカートを引っ張り出し、カゴを載せて店の奥へと進んでゆく。

ノムラスーパーの買い物客の中で、庶民には近寄り難い高貴なオーラを全身から放っている不破親子は、正直、ひどく浮いていた。

そんなふたりとともにいる愛美は、とんでもなく落ち着かない気分を味わう羽目になった。

こうなったら、さつさと買い物をすませて帰るしかない。

「優誠さん、何を買うんですか？」

不破は、少なくとも数の野菜の名前を並べた。

気が急いでならない愛美は、彼が口にした野菜を手に取り、手早くカゴの中に入れていく。

実継は店内を興味深そうに眺めながら、愛美と不破についてきていた。

愛美はため息をついた。たかが買い物に、こんなにも緊張し、精神的疲労を感じたのは初めてだ。

「あとは、お刺身ですね。徳治さんが電話でお願いしておくとのことでしたから、お店の方に声をおかけて……」

「わ、わたし、いただいけます」

愛美は飛ぶ勢いで鮮魚売り場に向かった。

魚が並んでいる売り場のガラスの向こうに、光彦の父の姿があった。

「おじさん」

光彦の父は愛美の声にパツと振り向き、親しげな笑みを浮かべた。

「らっしゃい。注文の品はできてるよ」

そう言うと、光彦の父はいったん奥に引っ込み、手に大きな皿を抱えて出てきた。刺

身が豪勢に盛り付けられた大皿だ。受け取ろうと、愛美は手を伸ばしたが、受け取ったのは不破だった。

「うん？ あんた、愛美ちゃんの連れかい？」

「はい」

不破は魅力的な笑みを浮かべつつ、手にした皿を見つめた。

「素晴らしい盛り付けですね。箸をつけるのが惜しくなるほどです」

「おほっ、嬉しいこと言ってくれるねえ、あんた」

「優誠、私にも見せてくれ」

「父上。では、これは父上に運んでいただきますようか。運びながらゆっくり眺めてください」

不破は悪戯いたずらっぽい目をして、手にした大皿を父親に押しつけた。

「案外重いな」

「この程度の重みを、重いなどとは……もっと身体を動かされたほうがよいのではありませんか？」

からかいをたつぷり含んだ息子の言葉に、実継は口をへの字に曲げた。

「お前よりは、よほど動いていると思うがな。それにしても、この皿は見事なものだな」
実継の言葉を聞いた愛美は、皿を確かめた。これは父の作った皿のようだが、家にあ

るものではない。

「おじさん、このお皿は？」

光彦の父に愛美は尋ねた。不破と実継に目を向けていた光彦の父は、慌てた様子でこちらを振り返る。

「お、お。プラスチックのやつでいいと言われたんだが、それじゃあ、盛り付けの楽しみが減るしよ。今度、ついでに持ってきてくれりゃあいいから」

「すみません」

「いいって、いいって、こいつはもともと徳治さんがくれたもんだからさ」

「ほお、これは蔵元君の作でしたか。見事なものだ」

「蔵元？」

光彦の父は、眉をひそめて実継に聞き返した。

「いや……失礼、間違えました。早瀬川でしたね」

光彦の父は、納得した表情になった。

「ああ、そうか。徳治さんの以前の……。あんたさんは、徳治さんの昔からの知り合いなんですか？」

「ええ。これから彼のところに行つて、久しぶりに会うことになっているんですよ」

「ああ、そんでは。珍しい客人が来るからこいつを頼むってことだった」

光彦の父の豪快な笑顔につられたように、実継もやわらかな笑みを浮かべた。

「ご馳走になりますよ。口にするのがいまから楽しみです」

光彦の父とのやりとりで、実継の表情はぐっと和んだものになった。

2 笑いの禁止

愛美は、後部座席に座っている実継をそっと窺^{うかが}った。実継は、刺身が盛られた大皿を膝に載せている。

彼女が持つと、言ったのに……結局、不破の父に持たせてしまつて、本当に良かったのだろうか？

買い物に付き合わせたうえに、刺身の皿までも……

だいたいこの刺身は、お客様である不破の父をもてなすために作つてもらつたものなの……

愛美は、小さく唇を突き出し、運転している不破の横顔をじつと見つめた。

彼ときたら、この状況を愉快がっているようだ。そして実継のほうも、おそらく稀^{まれ}であろ^うう体験を、楽しんでいるように見える……

つまり、わたしが気にする必要はないってことかしら？

「良いところだな……」

実継は独り言のように、小さな眩きを漏らした。

「そうでしょう。早瀬川家は、山の神に守護されているようですよ」

「大切にされているんだろう」

「ええ」

ふたりの会話を耳にしながら、愛美は山の神の存在を感じようとした。

ここを通る皆が皆、この山の道に特別なものを感じるようだ。生まれてからずっとここで暮らしてきたせいかな、愛美はその特別さをあまり感じられていないようだった。

山の家に到着し、不破は徳治の車と並べるようにして車を停めた。

三人が車を降りたところで玄関が開き、徳治が出てくる。

「あ……お父さん、た、ただいま」

愛美は落ち着かない声で父に声をかけ、実継に駆け寄った。

「あ、あの、お皿、持ちます」

実継は愛美に向けて小さく微笑み、「優誠」と息子に声をかけて、彼に皿を手渡した。そんなやりとりをしている間に、徳治はこちらへと歩いてきていた。

父は、お客様に皿を持たせていたのをすっかり目に収めたに違いない。愛美はちよつと気まづく思った。

「実継さん、おひさしぶりです」

徳治は不破の父に対し、敬意を込めて頭を下げた。

「蔵元……いや、徳治君、こんな形で君に会うことになるうとは、思いもしなかったな」

「それは私も同じです」

笑みを浮かべた徳治とは対照的に、実継はなぜか表情を翳^{かげ}らせた。

「奥方のことは、お気の毒だったな」

その言葉をもらった徳治は、一瞬視線を下げ、「ええ」とだけ答えた。だが、すぐに顔を上げて歓迎の笑みを浮かべる。

「さあ、上がってください」

「ああ。お邪魔させてもらおう。ところで、徳治君」

「なんででしょうか？」

「上島は……彼はどこかな？」

実継は眉を寄せて周りを見回している。

そ、そうだった。優誠さんのお父様は、上島さんに会うためにここに来たのだ。

上島さんってば、どこににいるのだろう？

愛美も周囲を見回して上島の姿を探したが、どこにもいない。不破の父がやってきたのだから、上島は何をおいても、飛ぶように出迎えにくるはずなのに……

「上島さんは、今日は休みなんですよ」

徳治が言った。愛美は父に目を向け、それから実継に視線を移した。

「休み？ それでは出かけているのかな？」

「いえ。工房にいます」

「上島が、工房？」

驚いたように不破が言った。

「ああ。今日は休みなんだから家のことは何もしなくていいと言ったら、やることがないと言うんだ。土をいじってみないかと持ちかけたんだ」

愛美と不破に向かつて説明した徳治は、今度は実継に向かい、話を続けた。

「ずいぶん熱中しているようでしたから、貴方がここにおいでになることは、まだ伝えていないですよ」

「徳治君、上島は陶芸をしているというのかい？」

「ええ。午前中からずっと工房にこもっています。できれば、彼がいま作っているものが、納得ゆくものに仕上がるまでお待ちいただけませんか？」

実継は困ったような表情をしたものの、結局了解したように徳治に頷いた。

「上島までも陶芸に魅入られるとは……思ってもいませんでした」

台所でお茶の支度をしながら、おかしそうに不破は言う。

「ここにいると、みんな土に触れたくなるのかもしれないね」

「そうかもしれないね。実際、私もそうだ」

不破は慣れた手つきで湯呑みにお茶を注いでゆく。最初の頃はぎこちなかった動作もスムーズになり、いまは馴染みのことのようにそつなくこなしている。彼の順応性の高さには感心してしまう。

湯呑みを載せたトレーを不破が持ち、ふたりは居間に戻った。

ドアの近くまで来ると、徳治と実継の楽しげな声が聞こえた。

「父上と徳治さんは気が合うようですね。父上はずいぶん楽しそうだ」

「優誠さんのお父様と父は、親しかったんでしょうか？」

「うーん、どうでしょう。歳がずいぶん違うし……それでも、ふたりの様子を見るに、ただの顔見知り以上には、親しくしていたように思えますね」

愛美は同意して頷き、ドアを軽くノックした。

お茶を差し出す息子を見て、実継は苦笑した。

「お前にお茶を入れてもらうことがあるとはな」

「お茶くらい、飲みたければいくらでもお出ししますよ」

不破はわざとだろうが、ひどく生真面目に言うのと、彼がお茶を配る様子を立って見ていた愛美に、座るよう促^{うなが}してきた。

愛美が座ると、不破も彼女の隣に腰かける。

「楽しくお話をされていたようですが、何が話題になっていたんですか？」

「もちろん。君たちふたりのことだ」

実継はそう言うとお息子の入れたお茶をうまそうに啜^{すす}り、改めて不破と愛美を見比べるように見つめてきた。

実継の視線を受けて、愛美は少しだけ緊張した。

「婚約披露パーティの日取りは、私の母と妻も交えて決めたいと思うが……」

愛美はぎょっとした。婚約披露パーティの、ひ、日取り？

「そんなもの必要ありませんよ」

不破の即答に、愛美は思わず大きく頷いて同意しそうになった。

「母と麗奈は、必要ないなどは、けして思わないと思うが？」

「それでは、身内だけのささやかなものを……」

父親に応戦している不破を、心の中で必死に応援する。

「それを私に言っても、意味がないぞ」

その言葉に、愛美は気落ちした。応戦するべき相手は、不破の母と祖母ということらしい。

不破は眉をひそめ、「わかりました」と仕方なさそうに答えた。そして、すぐに話題を変える。

「父上は、徳治さんと昔からお知り合いだったのですか？」

「ああ、徳治君のことは、彼が幼い頃から知っている」

なんとなく予想はしていたものの、その言葉はそれでも愛美を驚かせた。

「そんなに昔からのお知り合いでしたか」

「蔵元家の琴子さんと私の母は、昔からとても仲が良かったからな」

「母と一之瀬の叔母に連れられて、初めて不破の家にお邪魔したときのことをいまも覚えていますよ。その頃はまだ、いまの屋敷に建て替える前で……」

徳治はその思い出話を、しかめっ面^{つら}で口にした。

それらの過去のことに對して懐かしさはあるようだったが、父の性格上、口にするのは照れくさいのだろう。

「以前の屋敷か……懐かしいな」

その話を、愛美は不思議な思いで聞いていた。幼い父のこと、そして父がさりと出した父の母、愛美にとって祖母にあたるひとの話……

「あ、あの、わたしの祖母のこと、覚えていらっしゃるんですか？」

愛美にとって、祖母というと、夢の中で見た自分そっくりの女性の姿しか思い浮かばない。

「ええ、もちろん」

実継は頷き、愛美の顔をじっと見つめてきた。

「笑みの美しいひとでしたね。徳治君を抱いて、よく微笑んでおられた。……愛美さん、貴方にとってもよく似ておいでだった。いまさらだが、初めて貴方にお会いしたときに、誰かに似ていると思ったんだ」

「そんな余裕がおりだったのですか？」

明らかな嫌味を込めて言う不破に、愛美は冷や汗が出た。

息子の指摘に、実継は困ったように口を曲げたが、改まった表情になり、徳治に向き直る。

「徳治君、君に謝らねばならないことがあった」

「なんですか？」

実継は、誤解から愛美をひどく傷つけたことを正直に徳治に語り、最後に深々と頭を下げて謝罪をした。

「頭を上げてください。もう過ぎたことです。それより、もう昔のことは勘弁していただけませんか。娘の前で語られると、恥ずかしくてならない」

苦笑しつつそう言うと、徳治はすぐに話を変えた。

「ところで……優誠君の勘当は、解けたわけですか？」

不破の父から祖母のことをもっと聞きたかった愛美はがっかりした。

徳治の問いに、実継は含みのある笑みを浮かべる。

「それについても、説明しなければならぬな」

実継は、佐藤知樹さとうともきについて徳治に詳しく語り、彼を不破の籍に戻すために策を講じているところだと話した。そして、息子の勘当を解くのはまだ先になりそうだと説明する。

「そうでしたか。それで、うまくゆきそうなんですか？」

「それが、なかなか頑固なやつでね」

「そうですか……ともかく、優誠君のことは私に任せてください。おかげで我が家はこれまでになく賑やかになったし、上島さんまで家族に加わってくれて……」

「その上島ですが……」

徳治は実継の言いたいことがわかったのか、「残念だな……」と寂しそうに呟いた。

「私も上島がいないと困るのですよ」

「ご自分で解雇なさったくせに」

不破の遠慮ない指摘に、実継は顔を曇らせた。

「それを言うな。知樹に私の本気を見せつけるためだったんだ」

「だが、うまくいっていない」

父親をからかうように不破は言った。

実継の頑張りには、今のところ意味がないだろう。知樹は、愛美の親友である蘭子の姉、藤堂橙子との関係がうまくゆかない限り、不破の籍に戻ろうとはしないに違いない。

彼は、いつでも好きなときに、好きなのところに行ける自由を手にしたいのだ。

不破の籍に入れば、藤堂家との繋がりを簡単に絶てなくなる。

知樹は……誰かのものになった橙子を……見たくないのだろう。

実継は、息子を軽く睨み、徳治に顔を向けた。

「不肖の息子ですが、頼みますよ」

徳治に向かって頭を下げた父親に、不破は顔をしかめる。

「父上、子どものような扱いをなさるのは、やめていただけませんか」

「おかしいことを言うな。子どもじゃないか。お前の悪ふざけの尻拭いを何度させられたか」

「父上！」

「愛美さん、聞きたくないかな？」

もちろん聞きたかった。できれば全部。だが、不破の手前、鎮くわけにもゆかない。

「語りつくせないほどあるんだ、これが」

「父上、大袈裟に言わないでください。そんなに言うほどありはしませんよ」

息子の憤り混じりの言葉などどこ吹く風で、わざとらしいため息を漏らす実継に、不破は歯ざしりしている。

どうやら不破には、琴子が話してくれたザリガニ話に匹敵する話が、まだまだあるらしかった。

突然実継が笑い出す。間をおかず、徳治も笑いに加わった。

不破はむっとり顔で、愛美に笑いを禁止するような目を向けてきた。彼にすれば不本意極まりないだろうが、その眼差しがおかしくて、愛美は吹き出さずにはいられなかった。

3 ゆるぎなき信頼

父親に向けて声を荒らげる不破を、愉快そうに見つめていた徳治がふいに愛美を振り

返った。

「愛美」

「はい」

「上島さんの様子を見てきてくれないか。納得のゆくものができたようだったら、夕食の支度を手伝って欲しいと声をかけてくれ」

「あ、はい」

すぐに腰を上げた愛美に続いて、実継も立ち上がる。

「私も、一緒にしてもいいかな？」

「ですが」

心配そうな徳治に、実継は言葉を足した。

「上島の邪魔はしない。もしまだ終わっていないようであれば、私はそのまま戻ってこよう」

その言葉に徳治が頷いたため、愛美は不破の父と工房に行くことになった。

不破は湯呑みを片付け始めている。

「優誠さん、わたしが戻ってきてからやりますから……」

「まな、これくらいのこと、私がやれます。行ってきたください」

不破に促された愛美は頷くほかなく、実継を伴って居間から出た。

「愛美さん」

後ろを気にしつつ先に玄関から出た愛美は、あとから出てきた実継に名を呼ばれ、緊張の面持ちで身体ごと振り返った。

「は、はい」

「ひとつ、お聞きしたいことがあるんだが」

「な、なんでしょうか？」

見るからに緊張した愛美に、実継はふっと笑いをこぼして口を開いた。

「知樹について、優誠と貴方は、何かご存知なのではありませんか？」

「えっ？」

思ってもいなかった内容に、愛美はびっくりした。

「ど、どうしてですか？」

「優誠の反応……かな」

「優誠さんの？」

「ええ。知樹のことを話したときの、優誠の様子が……どうも何か含んでいるように感じられてね」

愛美は実継の鋭さに舌を巻いた。そしてそんな彼女の反応を目にして、実継はさらに

確信を深めたに違いない。

「確かに、そのとおりです。あの……でも、佐藤さんのことは、わたしたちに任せてくださいませんか？」

しばし無言で、実継は愛美を見つめてきたが、思案した末に頷いてくれた。

「わかりました。どうやら、私の知らない何かがあるらしい」

愛美は何も言わずに、ただ頷いた。

「あの、そ、それじゃ、工房に行つて、上島さんの様子を見てきます」

彼女はそう言うのと、小走りで工房に向かった。

ドアを静かに開けて中の様子を窺^{うかが}い、工房に入る。上島は、これまで見たことがないほどリラックスした様子で、手の中にあるものをじっと見つめていた。

数分、愛美は上島を見つめていたが、外で不破の父が待っていることを考え、静かに彼に近づいていった。

「上島さん」

愛美はそつと呼びかけた。上島は驚くことなく、ゆつくりと顔を上げ、彼女のほうを見た。

「素敵ですね」

愛美は上島の作ったものを見つめながら言った。

「そう……でしょうか？」

ひどく照れくさそうに、上島は相好^{さうこう}を崩す。

「土に触れるというのは、なんというか……良いものですね」

「そうですね。土はひとかけらでも、大地そのものだから……」

上島はハツとしたような顔をし、それから大きな笑みを浮かべた。

「そうだ。愛美様のおっしゃるとおりです。大地に触れているということなんです。ね。……心が静まって、土の声を耳にできているような気になりました」

「土は、上島さんに何を語ってくれたんですか？」

「残念ながら、何をとまでは……。ですが……そうですね。私という人間を、あるがまま認めてもらえたような……土に手を触れていると、不思議なほどの安堵を覚えました」

愛美は上島の側まで行って座り込み、彼の作った作品を間近で見つめた。

上島の生真面目さと無骨さ、そして温かさが滲^{にじ}んでいる作品だった。

「愛美様、そんなに見ないでくださいませんか。なんとも未熟で、恥ずかしいですから」
愛美は首を横に振った。

「そんなことはありません。味わいがあつて、とっても素敵です」

「そうでしょうか？ あ、ありがとうございます。……あの、ところでいま何時でしようか？ そろそろ夕食の支度をしなければ……」

「ええ。父が手伝って欲しいって……でも、今日は上島さん、お休みなんでしょう？」
「お休みをいただきましたが、夕食の支度はいたしますよ。実は、お昼は徳治さんに作っていただいたのです」

とても特別なことのように、上島は口にした。

恐縮しながらも、ひどく嬉しかったのだらうと思えた。

「美味しかったですか？」

上島は、困ったような顔になった。

「申し訳ないとはばかり考えてしまつて……あまり味わうことができませんでした」

そう言つて肩を落とす。

「それじゃ、次はちゃんと味わつてあげてください。そしたら、父も喜びます」

上島は笑みを浮かべ、頷いた。

「そうします」

上島の返事とはとても嬉しかったが、もう次の機会はないだろう。

彼は今日、実継とともに、不破の家に帰ることになるのだ。上島が帰つてしまうと、父は寂しくなるに違いない。

そう考えた愛美は、外で待たせたままの実継のことを思い出した。

い、いけない……

立ち上がった愛美は、急いで工房のドアに向かつていった。

「愛美様？」

彼女の様子をいぶかしく思ったのだらう、上島が立ち上がつて呼びかけてくる。

「あ、はい。あのお」

ドアを開けると、実継はすぐ側にいた。愛美は不破の父に向けて小さく頷いてみせる。実継は愛美に頷き返し、彼女の横をすり抜けて工房の中に入った。

「上島」

やさしい呼びかけだったが、その声は上島を仰天させたようだった。

「だ、旦那様、な、なぜ、こ、ここに……」

驚きが過ぎて目を見開いている上島に実継はさつと歩み寄り、深々と頭を下げた。主人である実継に頭を下げられた上島は、直立不動の状態で固まつてしまう。

「お前に謝りにきた」

「は？ な、なんと」

愛美は工房から出て、そつとドアを閉めた。

「まな」

その声に、愛美は驚いて顔を上げた。窓に寄りかかるようにして、不破が立っている。

「優誠さん」

愛美は急いで不破に駆け寄った。

「上島は、作り終えていましたか？」

「は、はい」

不破は頷き、愛美をそっと抱き寄せた。愛美は逆らわず、その胸に抱かれた。すでに夕暮れで、冷たい空気が肌を刺す中、不破の香りとぬくもりが心地良かった。

「雲が、芸術的な色合いに染まっていますよ」

空を見上げている不破に倣い、愛美も上に目を向けた。

木々に囲まれた庭から見える空。西の空の雲は、薄桃色と茜色あかねいろと灰色に染まっている。

「ほんの少し……そのあたりを、散歩してきませんか？」

不破は最初から散歩に誘う心積もりだったのか、厚手のコートを着ていた。

コートを広げ、愛美と一緒に入れてくれる。

実継の話もそう簡単に終わりにしないし、少しの間くらいなら大丈夫だろう。

それに、不破は散歩に行くと、徳治に告げてきたに違いない。

笑みを浮かべて頷いた愛美は、不破と一緒に墓地へと続く小道へと歩き出した。

小道に入ってすぐ、不破は足を止め、コートで包んだまま愛美を抱きしめてきた。

彼女が驚きを見せる前に、不破の唇は彼女の唇の端に柔らかに触れていた。

彼女の身体を抱く不破の手の動き、そして口の端に触れている不破の唇の動きは、否定のしようがないほどエロチックだった。

不破の唇は愛美の唇に重なることなく、頬を伝い首筋へと下りてゆく。

彼女は首筋に感じる甘い疼きうずに、ぴくりと肩を震わせた。

「ゆ、優誠さん……」

「まな」

愛美は閉じていた臉まぶたを薄く開けた。

「ためらいを感じていませんか？」

「えっ？ な、何……が？」

愛美のその返事に、不破はなぜか安堵したようだった。

「優誠さん？ あの……」

「心配していたのですよ」

心配？

「あの、何を？」

「婚約披露パーティのことです」

そうだった。不破の父が……

彼女の表情を確認した不破は、小さく頷いた。

「母と祖母は、間違ひなく大規模な宴^{うたげ}を執り行おうとするでしょう。もちろん、まなの負担にならないよう、強く意見するつもりですが……相手があのふたりでは、難しいかもしれません」

愛美は思わず顔をしかめた。不破と初めて会った藤堂家のパーティ、そして城のような不破家の屋敷で行われていたクリスマスマスパーティが頭に浮かぶ。

あんなパーティの主役となつて、経験もないのに、そつなく事をこなし、上品に立ち回らなければならぬのか？ もちろん彼女の隣には、不破がいてくれるだろうが……

「まな……私についてきてくださいますよね？」

不安からくる硬い表情で、不破は一心に願うような眼差しを愛美に向けてくる。

青い瞳を見つめ、愛美は胸が苦しいほどきゅんとした。

彼を愛している。ずっと側にいたい。彼の妻として、ふさわしくありたい。けど……わたしはわたしでしかないらしい。

うまくやろうなんて考えるのはやめよう。知らないことは、教えてもらつて覚えてゆけばいいし、できないことは、できるようになるまで練習すればいい。

「優誠さん。ダンスを教えてもらえますか？」

「まな？」

どうしていま、愛美がそんなことを言い出したのかわからず、不破は戸惑っているよ

うだ。愛美は微笑んだ。

「だって、教えてもらわないと、優誠さんと踊れないから……」

「まなが覺えたいのなら、もちろん教えますよ」

愛美ははにかみながら頷いた。

彼女は大きく息をつき、胸の内にあることを不破に伝えるために口を開いた。

「優誠さん、わたし……きつと、何一つ、うまくやれないと思います」

「そんなことは……」

否定しようとする不破の唇を指先で押さえて彼の言葉を封じつつ、愛美は首を横に振った。

「きつと、優誠さんの顔に泥を塗るようなことも……してしまふと思います」

「まな、私は……」

愛美は不破の唇に触れている指を、彼の頬へと滑らせた。

「わかつています。優誠さんはそんなことで恥づかしがったりしないし、怒ったりもしない。……でも、わたしは落ち込んで、自分を責めると思います」

愛美は不破の頬を包むように両手で押さえ、彼を自分に引き寄せつつ爪先立ちになつてキスをした。

突然のキスに驚きを見せている不破の目を、愛美はまっすぐに見つめる。

「わたしが落ち込んだら……いっぱい慰めて欲しいです」

不破が心配しているとおり、愛美はいまも恐がっているし、土壇場になった情けないほど怖気づくだろう。それでも……

彼のすべてを……彼の生きる世界ごと受け入れずして、不破とともに生きることはいかないのだ。

「優誠さんがいてくれたら、わたしはなんでもできます。怖気づくこともあるだろうけど……それでも立ち向かってゆけます」

「まな」

不破の囁きに、胸の中心が甘く疼く。疼きは切なくて苦しくて……でも、もどかしいほどしあわせて……

「優誠さん……」

「愛していますよ」

「わたしが言おうと思ったのに……」

不服を込めて唇を突き出し、愛美は文句を言う。

しまったというように不破がきゅっと眉を上げたのを見て、彼女はくすくす笑った。満ち足りた思いで、彼にぎゅっと抱きつく。

不破のコートに包み込まれている自分。彼に庇護されているのを嬉しく思うし、心か

ら安心できる。

だけど……わたしはそれに甘えない。

心には恐れと不安が住み着いているけれど、いまの彼女はどんなことにも真正面から立ち向かえる自信がある。

愛美はまっすぐに不破を見つめた。それに応えるように、不破が見つめ返してくる。

「まな……」

聞き損ねた愛の言葉を催促するように、不破が呼びかけてきた。

愛美は不破の胸に顔をうずめ、彼の求める言葉を囁いた。

不破の腕の力が増す。かけがえのないぬくもりに愛美はその身をゆだねた。

4 残念な決断

「上島さん、ここは不破の家ではないんですよ」

「もちろんわかっております。ですが……」

数分前から続いているやりとりを、愛美は台所の入り口近くで見守った。居間にはすでに食事の支度が整っている。不破と実継は、愛美たち三人がやってくるのを待ってい

るのだが……

上島は、自分の主人である実継と同席して食事を取るなど、とんでもないことだと言ってきたのだ。不破と食事を共にすることになったときもこんな様子だったが、不破と実継とはまた違うらしく、あのとき以上に頑^{かたく}なだ。

「実継さんは、貴方が一緒に食事を取るものだと思っておいですよ」

「徳治さん……」

上島は青ざめた顔で、首を小刻みに横に振る。

「楽しみにしておられるのに……実継さんをごっかりさせてしまっているんですか？」

その言葉は、上島をうろたえさせたようだ。

彼は弱りきった顔で、徳治を見つめ返す。

「ですが……」

「上島さん、貴方は、実継さんとの食事は息が詰まるのかもしれないが……そこは、我慢してでも、実継さんを喜ばせてあげてはどうです？」

徳治のその言葉は、上島を飛び上がらんばかりにぎよつとさせたようだった。

「い、息が詰まるなど……と、と、とんでもございません！」

「だが、そうじゃないですか。実継さんは貴方と食事をしたいと望んで、とても楽しみにしておられるのに、貴方は嫌だ嫌だとおっしゃる」

「そ、そんな。嫌だなどとは……」

「そうですか、なら一緒に食べることに異論はないと？」

「……徳治さん」

ひどく疲れの滲^{にじ}んだ顔で、上島は責めるように徳治の名を呼ぶ。

愛美は少し複雑な心境ながらも、笑みを浮かべた。どうやら、勝負あったようだ。

「それじゃ、お父さん」

愛美は、タイミングよく父に声をかけた。

「ああ。上島さん、ほら、行くぞ」

徳治は、身を強張^{こわば}らせている上島の背中に手を当て、彼を促す。

こうなってはもうどうしようもないと諦めたのか、上島は徳治に背を押されながら、重い足取りで台所から出た。

父と上島の後ろについてゆきながら、愛美は上島の気持ちを思っ顔をしめた。

上島の気持ちはよくわかる。

だいたい愛美だって、実継と一緒に食事を取ることに緊張を感じるのだ。上島にすれば、愛美の十倍は緊張するに違いない。

それでも……上島さんにとって、これっていいことなのか……

主従の間柄だった実継との繋がりが、いい意味で変わるんじゃないだろうか？

愛美にしても同じことが言えるのだと思う。実継の、初対面のときの恐ろしい印象を、これで彼女も変えられるに違いない。

そんな風に考えたものの、食事の席についた愛美は、やはり緊張していた。もちろん、徳治の隣に座った上島は、見るのも忍びないほどガチガチに固まっている。

片や実継のほうはというと、相好を崩して喜んでゐる。

「さあ、実継さん、まずは一杯いかがです？」

実継に向けて、徳治はぐい呑みを差し出した。

「ありがとう、ただこう」

ぐい呑みを実継が受け取ると、徳治は黒い塗りのとっくりを手に取った。そのとっくりを見て、愛美は首を傾げた。見たことのないとっくりだ。

「さあ、上島さんも」

実継に酒を注いだ徳治は、自分の隣に座っている上島にもぐい呑みを差し出した。ぐい呑みを見つめた上島は、目を見開いて困惑している。

「と、徳治さん。わ、私は……」

「いいから、いいから、ほら」

父ときたら、どうしてよいやらわからず顔を歪めてゐる上島に、無理やりぐい呑みを押しつける。

見ていられず父をいさめようとした愛美は、隣に座っている不破に止められた。彼に目を向けると、愉快そうな顔で笑いを噛み殺している。いま口出しをしてはいけないと言いたいらしい。

愛美は顔をしかめたが、それでも不破は駄目だというように首を振る。

「徳治君、私に注がせてくれ」

実継はそう言いながら、徳治に向けて手を伸ばした。徳治はすぐに頷き、とっくりを実継に渡した。

とっくりを手にした実継は、身を乗り出すようにして、上島のほうに差し出す。上島がこの事態を頭の中で処理できないでいるうちに、実継は上島のぐい呑みに酒を注いってしまった。

不破は楽しそうにこの様子を見ている。上島を心配して見守っていた愛美も、ぐい呑みを手にして目を白黒させている上島を見て、思わず笑いが込み上げた。

上島のことで、いらぬ心配などしなくてもいいのだ。父と不破の父に安心してまかせておけばいい。

「さあ、徳治君も」

実継は何事もなかったかのように、続けて徳治のぐい呑みに酒を注いだ。

「それでは、ただこう」

そう口にした実継は、徳治と目を見交わし、ふたりは同時にぐい呑みに口をつけた。そのふたりにつられたのか、上島も慌てて口をつける。

どうも上島は、自分が何をやっているのか、自覚できていないようだ。

「ああ、美味しい酒だ。……上島、美味しいな」

しあわせそうな笑みを浮かべた実継は、ひとりごちるように言ったあと、上島にやさしく声をかけた。

「は、はい」

顔を強張^{こば}らせての返事だったが、実継は嬉しそうに頷く。

上島が極度に困惑したまま、食事は進んでいった。彼のことを気にしていたせいで、愛美は、むしろ緊張を感じずにいられた。

実継と徳治のふたりが交互に注^つぐ酒を機械的に口にするうちに、上島の表情から緊張が少しずつ消えていった。そして、それに代わるように、だんだん笑みが浮かんでくる。はじめは実継と不破と徳治の三人が語り合うのを、上島はただ聞いていただけだったが、話題が陶芸のことに移ってからは、控えめながらも、少しずつ会話に参加するようになった。

上島がこの場を心から楽しんでいる様子がはつきりと窺^{うかが}えるようになり、愛美は嬉しくなった。

「土に触れるというのは、本当にいいものだとなりました」
酒のせいで少し赤らんだ顔で、上島は控えめに言った。

「そうか。私も体験してみたくなったな。こんな味わい深い器が自分の手で作れたら……」
「実継さん、では、ひとつやってみてはどうです？」

本気なのか、それともからかっているのか、徳治は笑いながら実継に勧める。

「やらせてもらえるのかね？」

「もちろんですよ」

「上島の作っていたものは、いつごろ出来上がるのかな？」

「そうですね。一ヶ月ほどで」

「なんだ、そんなにかかるのか」

「ええ、これから一週間ほど乾燥させたあと素焼きをして、釉^{ゆう}薬を塗り、本焼きとなるので」

「そうか。じっくりと工程を進めてゆかなければならないんだな。そうして、こんな見事な皿が完成するわけだ」

実継は、自分の手元にある皿を手に取り、じっくりと眺め始めた。

「旦那様、それは、愛美様の作なのですよ」

突然自分の名を出され、ずっと聞き役に徹していた愛美は、驚きとともに思わず背筋

を伸ばした。

「ほお」

感嘆したような叫びを上げた実継の視線が自分に向けられ、愛美はまごついた。

「愛美さんは、素晴らしい才能をお持ちのようだ」

「ええ、娘は陶芸家としての素質を持っています。実継さん、ひとつお願いがあるのですが……」

「徳治君、なにかな？」

「優誠君の妻となつても、娘には陶芸を続けさせてやりたいんです」

話題が自分のことになり、恥ずかしくて縮こまっていた愛美は、父の言葉に目を見張った。「もちろん私も、まなに陶芸を続けてもらいたいと思っています。徳治さん、私との結婚が妨げになるようなことは、けしてありませんよ」

愛美は不破を見上げた。彼は彼女と目を合わせ、やさしく微笑む。

「うむ。そのとおりだ。徳治君、安心してくれていい」

実継の言葉を真摯な顔で受け止め、徳治は感謝を込めて頭を下げた。それを見て、愛美も焦りながら頭を下げる。

「愛美様は、陶芸の神に愛されておいでなのだと、私には思えます」

しみじみとした口調で、不意に上島が言った。

愛美は顔を赤らめて上島に目を向けた。ほかの三人も上島を見つめている。当の上島は、みんなの視線に気づかぬようで、笑みを浮かべ、視線を宙に向けている。

「土はひとかけらでも、大地そのものと、愛美様がおっしゃられて……」

愛美は思わず息を止めた。上島以外の三人の目が、今度はいつせいに愛美に向いたのだ。「本当にそうだと。そう思った瞬間、なぜか不思議なほど喜びが……いえ、高揚感と言うべき感情が突き上げて……心が震えました。大地の魂に触れたような……」

目を閉じて話す上島は、そのとき自分が感じた感覚を、心に蘇らせているようだった。「愛美様は、大地の魂と繋がっておいでなのだと……感じました」

上島は心に浮かんだままを語っているのだとわかるのだが、愛美にすれば、恥ずかしいことこのうえない。

「なあ、上島」

皆が沈黙している中、実継が上島に呼びかけた。

「は、はい。旦那様。なんでございましょう」

「お前、ここに残りたいんじゃないのか？」

実継の言葉に、愛美は目を見張った。

「残りたいのなら、残ってもいいぞ。もちろん、ずっとというわけじゃない。優誠がここにいない間だけということになるが」

愛美は驚きながらも、笑みを浮かべた。

上島が残ってくれることになれば、父は嬉しに決まっている。

「徳治君、上島が、こちらにやっかいになっても……」

実継に尋ねられ、徳治は大きく頷いた。

「もちろん、私は大歓迎ですよ。こちらからお願ひしたいくらいだ。彼がいてくれたら、とても助かる」

「だ、旦那様？」

ひどく驚いた様子で、上島は実継に呼びかけた。

「どうだ？ 上島、残りたいか？」

「わ、私は……」

突然の話に、上島はどう答えればいいのかわからないようだった。驚きに染まっていたその顔は次第に戸惑ったものに変わる。

「上島、お前の望むようにすればいい」

実継は、それ以上何も言わなかった。

実継の思いやりを感じて、愛美は胸がいっぱいになった。

不破の父は、上島がいないと困ると言っていた。だから、こんなに早く迎えに来たのだ。それでも、早瀬川家での上島の様子を目にし、彼の言葉を聞き、ここに残してやるの

が彼のしあわせではないかと、考えてくれた。

戻ってきて欲しいと一言いえば、上島はためらうことなく実継とともに帰るだろうに、上島の望みを優先してやろうとしてくれている。

上島は困惑した様子で主人の実継を見つめていたが、一度俯き、そして心を決めたように顔を上げた。

愛美はドキドキしながら、上島の返事を待ち受けた。

きつと上島さんは残りたいと言ってくれる。

「私は……私は、旦那様とともに戻ります」

父の喜ぶ顔をすでに思い浮かべていた愛美は、上島の決断を聞いて、気落ちした。

愛美は父に目を向けた。徳治は失意を見せてはいなかった。

だが……父は残って欲しかったはず。

父の気持ちを思い、愛美は切なくてならなかった。

5 魔女にお願い

「あーい、愛美い？」

その返事に愛美は眉を上げた。
親友の桂崎百代に電話をしたのだが、返ってきたのは彼女らしからぬ元気のない声だ。
どうも寝ていたような感じた。

時刻は、すでに夜の十時を回っている。

先ほど不破の運転で、不破の父と上島は帰っていった。

ふたりを見送つてすぐ、父は風呂に入りに入った。ひとりになったところで、百代に電話しようと思ひ立ったのだが……。十時を過ぎて電話するというのは、遅すぎただろうか？

でも、今日起こった驚きの出来事を、彼女に伝えなくてはならない。百代だって、腰を抜かすほど驚くに違いない。

百代の反応を予想して、にやついている間も、受話器からは、あーとか、ふおーとか、意味不明の呻きのようなものが聞こえてきている。最後に「はあ」と疲れた吐息が聞こえたところで、愛美は話しかけた。

「百ちゃん、もしかして、もう寝てたの？ ずいぶん早いね」

「急激な睡魔に襲われて、反撃の甲斐もなく撃沈されちゃっただけで、別に負けたかったわけじゃないからさ」

「は、はあ」

寝起きにしては、ずいぶん凝った表現だった。

さすが百代、というべきか……

「そんで、一之瀬の……」

「そうなの！」

百代の言葉に、愛美は飛びつくように答えた。

「も、もう、とんでもなく驚くことがあったの！」

「ふん？」

「優誠さんのご両親とお祖母様がいらしたの。一之瀬のお家^{うち}に」

「ほっほお」

「そ、それでね、わたしのお母さん、一之瀬の大叔母さんの家で、友達になつてたらくて……」

そ、そうだ。アルバムを確認しようと思つていたのに……。あとで確認しないと……

「わたしが一緒に写った写真もあってね、もうびっくりしちゃって……」

「愛美い」

興奮気味にまくしたてていた愛美は、大声で名を呼ばれ、いったん口を閉じた。

「な、なに？」

「あんた、ちよつとばかり、落ち着きなよ」